

# 会話と会話をつなぐ表現「リンクワード」の効果的指導に関する研究

Research on the effectiveness of conversational 'LINKWORDS'

樋田 光代\* ・ 原田 信之\*\*

TOIDA Mitsuyo and HARADA Nobuyuki

キーワード：小学校外国語活動，中学校英語，会話の継続，小中連携，コミュニケーション

## I. はじめに

小学校外国語活動の全面実施後，小中学校で取り上げられている主要言語材料や題材に関し，それぞれのつながりを明らかにし，系統的な指導を行う試みが広がっている。

小学校においては，児童が一つの主要言語材料をおよそ4時間が配分される単元内で繰り返し使用できるように構成することが多い。普段の生活の中で英語を話さない児童でも，学んだ表現を安心して使うことができるよう配慮されている。中学校では，学ぶ言語材料も飛躍的に増える。新出言語材料には正しい理解が必要であり，それを表現に組み入れて活用することが求められる。

2008年版中学校学習指導要領の第2章第9節外国語において，第2の2「内容」の(1)「言語活動」のイ「話すこと」の(イ)の中で，「事実などを聞き手に正しく伝えること」が加わり，会話において内容のやりとりの正確さにも注意して指導することが求められることとなった。また，同(エ)の中で，「つながぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること」とし，「積極的に会話を継続し発展させていく態度や能力を育てるための活動」<sup>1</sup>を重視する姿勢を打ち立てた。

これは，「紋切り型の応答や一往復だけの言葉のやりとりで終わってしまうのではなく，必要な表現や技法を用いて会話を継続・発展させること」<sup>2</sup>において，指導の充実を図ることを意味している。つまり，主要言語材料を繰り返し練習させるだけでなく，表現と表現をつないで真の会話として成立させていくことにほかなら

ない。

そこで本稿では，「つながぎ言葉」とともに，挨拶や物のやりとりの際に使う，“Here you are.”といった児童生徒にとって身近な慣用表現に着目する。この慣用表現については，会話を継続・発展させていくのに大切な役割を果たす「リンクワード」と名づけ，これらの各発達段階における指導効果を研究する意図を有する。

## II. 研究の意義

本研究を行う意義は3つある。第一に，リンクワードが会話の継続に効果をもたらすかどうかを確かめることにある。会話を継続させるには，相手が話す内容の正しい理解が必要であり，その内容に関連する問いを返すことにより，話者同士の共有情報が増えていく。児童生徒がリンクワードを使いこなし，会話の継続により効果をもたらすことが確かめられれば，ややもすると主要言語材料の習得一辺倒に陥りがちな指導状況にあって，リンクワードを指導することの有効性に確証が得られることとなる。

第二に，リンクワードの働きを分類し，系統表を作成する。これは，コミュニケーション能力の伸長に向け，段階的な指導を可能にすることをねらいにしている。ここでもリンクワードに着目した新たな指導法の開発が期待できる。

第三に，会話は，背景的な知識や既習言語材料の習得状況とも密接にかかわって展開されることから，どのリンクワードがどの発達段階で指導されるのが最適であるのかを明らかにすることにある。即ち，発達段階に即した効果的な指導ができるようにするためである。

\* 岐阜市立厚見中学校，\*\* 岐阜大学

### Ⅲ. 研究の内容

#### 1. 会話を継続させるリンクワード

前述の通り、英語の授業では主要言語材料(小学校では英語表現)の習得に指導者の注意が注がれる。学習者も、学習初期においては、主にパターン・プラクティスを通して繰り返し、しゃべり慣れようとするだけで済まされるかもしれない。しかし、学習が進むにつれ、英語のみでの情報のやり取りが求められる。より多くの情報がやりとりされれば、コミュニケーションとして話者相互の理解を深めることにつながるからである。

この点、主要言語材料のやりとりだけでは、会話として不十分な状況に陥ることが少なくない。例えば、次のようなケースが考えられる。

野球が好きな二人の間で会話が始まったとする。一方が“What sports do you like?”という既習言語材料を使って質問し、他方が“I like baseball.”と答えたとする。ここでは、質問と応答という形式で会話が進行しているが、答えた側が“What sports do you like?”と同様の問いを繰り返せば、同じ形式の質問と応答を2度繰り返すドリル練習を行ったに過ぎなくなってしまう。この場合、単純パターン化されがちな会話の進行をどう打ち破れるかが指導上の鍵となる。

相手側が、“I like baseball.”と答えたのを受けて即座に“Me, too!”というリンクワードを返すことができれば、次の質問は、“Oh, do you like ○○(プロ野球チーム名)?”と、話者同士の共通の話題を見いだして会話が展開していくかもしれない。このように、相手が話した応答内容に応じて、自分の同意や不同意、快や不快を示したり、自己のパーソナルな情報を提供したりするなど、会話を継続・発展させるには、リンクワードの使用が大切な役割を果たすことがわかる。

リンクワードの効果について注目すべきは、語彙量や表現力の不足をも補う点である。例えば、自分の住む町の名所について外国人観光客に伝えた後、その観光客の地元の名所について尋ねるとする。完全に誤りのない疑問文で尋ね

ることは難しく、既習単語を羅列するだけでも、とっさには簡単ではない。このようなケースでは、主要言語材料を使って自分の地域の名所について伝え、身振りを交えながら“Your turn, please.”といった簡単なリンクワードを返せば、込み入った質問文をつくらなくても知りたい情報は得られる。ややくだけた表現ではあっても、得たい情報にアクセスする手段としては有効であり、実践性としても高い。

本研究において、小学校も含めて対象にするのは、「柔軟な適応力のある小学生段階」<sup>3</sup>に位置する児童が、どのくらいリンクワードを活用できるかについて、小中連携の観点からも展望をえたいからである。

#### 2. コミュニケーションスキル

話者が主要言語材料とリンクワードを備えていたとしても、相手と関わろうとする姿勢がなければ、会話は継続しない。小学校英語活動では、「目を見て話すこと」や「大きな声で話すこと」、「笑顔で挨拶をすること」など、お膳立てとして会話の作法が具体的な行動目標として示されることが多い。中学校においても、これらは「コミュニケーション能力」等と呼ばれ、小学校との接続を意識し、同じような指導が中学校でも続けられることが少なくない。

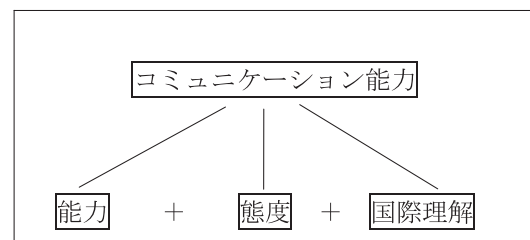


図1：コミュニケーション能力

コミュニケーション能力は、一般には「外国語を理解し、外国語で表現する能力」とされるが、ここでは、「能力」と「態度」に国際理解を加えたものと捉え、図1のように整理する。

このうち「能力」について、言語学によると、文法的能力 (grammatical competence)、社会言語学的能力 (sociolinguistic competence)、談話能力 (discourse competence)、方略的能力 (strategic competence) の4つに分類する

表1： ソーシャルスキルと英語のコミュニケーションスキルの相関性

ソーシャルスキル	基本的かかわりスキル	共感スキル	主張行動スキル	問題解決スキル
英語のコミュニケーションスキル	基礎コミュニケーション力	関わり力	深まり力	乗り越え力
力の内実	話す相手と気持ちよく接する力	話す相手と関わりを続けていく力	話す相手とより詳しいやり取りをしていく力	関わりを続ける際、困難に出会ったときかかわりを絶たずに、会話を続けていく力
具体例	視線を合わせて会話する。 はっきりと話す。 体を向けて話す。 表情を持って話す。	あいづちをうつ。 質問をする。 応える。 開けないようにする。	新しい質問をしようとする。 相手の応答に応じた質問をしようとする。	理解・不理解を伝える。 分ったふりをしない。 聞き返す。 言い換える。
指導のポイント	会話をする際の気持ちに気づかせる(紙芝居)。お互いの両手をタッチしてから会話を始める。	日本語で言いたいあいづちを挙げ英語の表現を紹介する。 相手の応答をメモしていく。	相手の答えに対して尋ねたいことをイメージする モデルを示す。 会話を2回行い、再構築の場を設ける。	尋ね返す言い方を提示する。 困難な場面を出し合う。 どう乗り越えたかを交流する。

考え方がよく知られている (Savignon 1983, p. 20)。

小学校段階では、この中の「方略的能力」を重視する傾向にある。この方略的能力とは、「言い換え」「繰り返し」「再確認」「回りくどい言い回し」「(難しいことわざや表現の) 使用回避」「身振り」などが考えられ、「コミュニケーションを維持するためには欠かせない能力」を指す<sup>4</sup>。使用可能な表現が十分に備っていないこの段階の児童にとって、相手の話すことを理解するために様々な手段がとれることが望まれることから、この指導が重視される。小学校は外国語(を使う)活動であるが故に、コミュニケーション能力の育成が重視される。ところが、文字を介する授業に慣れた、英語を専門としない小学校教員が陥りやすいのは、「大きな声で話そう」「笑顔で話そう」「目を合わせよう」といった、判断しやすい項目でコミュニケーション能力を評価してしまうことである。小学校と中学校の接続が重要な課題であり、段階的かつ構築的に指導できるコミュニケーションの捉え方が必要である。

ここで着目したのは、1970年代より注目されるようになったソーシャルスキルの考え方である。これは、社会的地位が高い家庭の子供は学業成績もすぐれ、逆に低く、孤立している子供は落ちこぼれる確率が高いといった学業成績との関連を指摘する研究 (Muma 1965, 1968) な

どにより、「学習指導に偏りがちな教育場面での社会性の重要性が見直され社会的スキルに欠ける子供に対する教育の必要性が認識されるようになった」<sup>5</sup> (庄司和子1994) とされている。ソーシャルスキルの概念は、用いられる領域によって重視される行動レベルが異なっている<sup>6</sup>。ここでは、よりよい対人関係の形成を求めていくスキルとして、ソーシャルスキルを4分類した考え方にのっとり、英語の時間で育成される行動を「コミュニケーションスキル」と呼ぶこととする。

表1は、ソーシャルスキルの視点として、①基本的かかわりスキル、②共感スキル、③主張行動スキル、④問題解決スキルの4つに分類する考え方(相川1999; 小林2005)に基づき、この4分類を英語の時間で育成するコミュニケーションスキルに対応させて整理したものである。このスキルを授業者及び児童生徒に意識させることの意図は、単に会話のお膳立てとしての作法的な態度に集中させるのではなく、本来ならば互いの中で紡いで構成されていく会話の内容にこそ意識を向かせることにある。そして、コミュニケーションには、分る・分らないなど通底性において揺らぎがつきものであることから、お互いの中に起こる不理解等の困難を乗り越えさせ、理解を保ちながら会話を継続させていくこともねらっている。

### 3. リンクワードとコミュニケーションスキル

主要言語材料が個人の中に記憶されるだけでは、会話は進展しない。相手と関わり、会話を維持していくにはコミュニケーションスキルが必要であり、会話のなかで持ち出されて増えていく情報を共有しながら、その情報を互いの関係下で構成することにより関係を深めていくのに、リンクワードが必要となる(図2)。

このリンクワードをコミュニケーションスキルの分類にしたがい整理し、発達段階にあわせた指導ができるよう作成した系統表が、表2~5である。

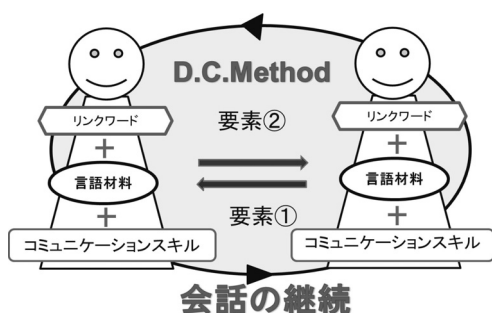


図2：会話の継続に向けた2つの要素

## IV. リンクワードの効果の検証

### 1. 検証方法

調査を行った地区では、小学校1年生より年間17時間、同3年生より年間35時間英語の時間を設けている。調査を行うA小学校とB中学校は同一校区にあり、B中学校の入学生ほとんどがA小学校の卒業生である。このA小学校1年生と6年生、B中学校2年生において、調査を行った。調査は、プレテストとポストテストからなり、それぞれ意識調査とインタビュー調査を行った。プレテストの後、各学年を実験クラスと統制クラスに分け、リンクワードの導入を行った。約5ヶ月後に、ポストテストを行い、効果を検証した(図3)。

調査を行う対象者数は以下のとおりである。

- A小学校： 第1学年 52名 2学級  
(男子26名・女子26名)
- 第6学年 61名 2学級  
(男子33名・女子29名)
- B中学校： 第2学年 68名 2学級

(男子34名・女子34名)

小中接続を考えると中学校1年生を対象とすることも考えられたが、小学校6年生と2年間の学習経験を経た中学校2年生を調査対象とすることで、会話の継続における段階的な指導の在り方を考える材料がえられると判断した。

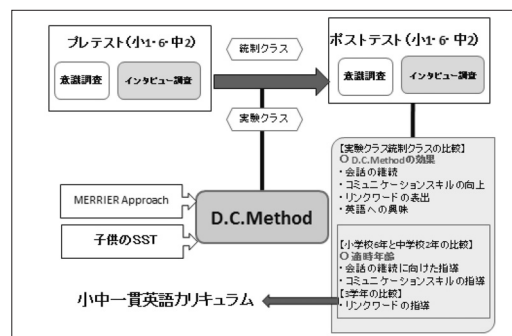


図3：検証方法

### 2. リンクワードのスキル別系統表

リンクワードにはそれぞれスキル別の働きがある。表2~5のリンクワード系統表は、小学校についてはA市のカリキュラム、中学校についてはNew Crownの内容を踏まえ、発達段階に合わせ整理したものである。

表2は、「基礎コミュニケーション力」に関するリンクワードである。これは、挨拶やお礼など、相手と関わり始める上で会話の基盤をつくる表現であり、英語学習初期には、“How are you?”という挨拶に慣れ親しみ、学習が進むにつれて“How are you doing?”といった、英語圏でよく使われる表現へと発展していくことを示している。

表3は、「関わり力」に関するリンクワードである。他者と関わり始めると、どう関わりを続けていくかが課題となる。例えば、相手の話した情報を理解したことを“OK”と伝えることにより、関係が保たれる。学習が進むにつれて、“I know what you mean.”というように、何を理解したかを伝える力をリンクワードの指導とともに行なっていく。関係を維持しながら、お互いの共通点や相違点を見出し、関係を深めていくことができるようになる。

表4は、その「深まり力」に関するリンクワードである。例えば、自分の考えを伝えたあとで、“And you?”と相手の意見を促すことがある。

表2：基礎コミュニケーション力に関するリンクワード系統表

表現の機能	スキル分類					学習指導要領
	小学校低学年	中学年	高学年	中学校1年	中学校2・3年	a コミュニケーションを円滑にする ・呼びかける ・相づちをうつ ・聞きなおす ・繰り返す
1 基本的関わりスキル あいさつ、自己紹介、上手な聞き方 人間関係の開始から維持・発展まで、人間関係全般に関わるスキル <b>基礎コミュニケーション</b>	<p>● 最適時 ← 適時 → *その後は繰り返し取り上げる</p>					
挨拶する	Hello. Hi. How are you?		What's up?	How's it going? How are you doing? Long time no see.		
話しかける	Hello.	Excuse me.	Can I talk to you now?		I would like to talk to you.	
お礼を言う	Thank you.	Thank you very much.	Thanks		Thank you so much.	
物のやり取りをする	Thank you. Here you are. You're welcome.					
分かれる	Good bye.	See you.	Bye		See you then.	
あやまる		I'm sorry.	Sorry.			
許す	OK.		That's OK.	Don't worry.	Alright.	
名前を言う	I'm ~.	My name is ye. ~.				
あいづちをうつ	OK.	Wow!	Me, too.	I see.	Really? Too bad.	Lucky you.
繰り返す	繰り返す					
了解する	OK.		I know!		I got it!	

表3：「関わり力」に関するリンクワード系統表

表現の機能	スキル分類					中学校学習指導要領との関連
	小学校低学年	中学年	高学年	中学校1年	中学校2・3年	b 気持ちを伝える ・礼を言う ・苦情を言う ・ほめる ・謝る
②スキル分類リンクワード例 最適時 ● ← 適時 → *その後は繰り返し取り上げる	<p>関わり力</p>					
2 共感スキル 質問する 仲間に誘う 仲間に入れる 人間関係を維持したり、新たな人間関係を作り出したりしていくためのスキル <b>【関わり力】</b>	<p>最適時 ● ← 適時 → *その後は繰り返し取り上げる</p>					
仲間に誘う	Let's play janken.		Let's try.		Why don't you...?	
仲間に入る	Let's ~	Can I join?	Can we talk?	Let's have a meeting.		
情報を確認する	繰り返す	~OK?	You like ~.	Is it ~ ?	You mean ~.	
質問する	(主要言語材料)					Do you have any questions?
ほめる	Good job(work)!	Super.	Excellent. Wonderful. Well done!		Good smile! (English, expression, loud voice, eye contact...)	
理解を示す	OK! Yes!		I know.		I got it!	
不理解を示す	Pardon?	What?	I'm sorry, I don't know.	I don't understand.	I don't know what you mean.	
励ます・応援する	Go!	Good luck!	Hanging there!	Close! Almost!	Congratulations!	Better luck next time!

表4：「深まり力」に関するリンクワード系統表

③スキル分類リンクワード例		深まり力		適時		*その後は繰り返し取り上げる	
		スキル分類				中学校学習指導要領との関連	
<b>3 主張行動スキル</b> あたたかいことばかけ 気持ちをわかって働きかける 他者との親密な人間関係を形成・維持するためのスキル 【深まり力】						e 相手の行動を促す・質問する・依頼する・招待する	
表現の機能	小学校低学年	中学年	高学年	中学校1年	中学校2・3年		
理解を確認する	OK?	You like ~OK?	~right?		You mean...		
同意を示す	Yes!	That's right.		I think so, too.			
不同意を示す	No.	That's wrong.	No, but...	I don't think so.			
感想を言う	Yummy. Good! Bad!	Good English! Good idea!	Nice story/speech/song!	Good presentation!			
意見を言う				I think ...			
上手に断る	I'm sorry.		Next time.				
詳しい情報を求める		And?	That's all?		Anything else?		
詳しい情報を伝える	~and~.	~or~.	~, but ~.		Not A but B.		
相手の意見を促す	And you?	How about you?	How about ~?				
話を展開する			Why?	By the way...			
依頼・お願いする	Please.						

表5：「乗り越え力」に関するリンクワード系統表

④スキル分類リンクワード例		乗り越え力		最適時		*その後は繰り返し取り上げる	
		スキル分類				中学校学習指導要領との関連	
<b>4 問題解決スキル</b> 解決策を考える 人間関係上だけでなく、さまざまなトラブルを処理することに関わるスキル 【乗り越え力】							
表現の機能	小学校低学年	中学年	高学年	中学校1年	中学校2・3年		
聞き返す	Pardon?	Excuse me? Once more, please?			Would you say that again?		
進行を促す			After you. You go first. Let's have a meeting.				
助ける		Are you OK?	May (Can) I help you?				
助けを求める	Help me.	~in English?	How do you say ~in English?				
時間を求める		Wait!	Just a moment, please.	Just a minute.	Wait a moment.		
言い換える				言い換える			

学習が進むと、“How about ~?” と、自分の知りたいことを特定して相手に意見を求めることができるようにする。

表5の「乗り越え力」は、会話を続けていく中で起こる、聞き取れない、理解できないといった困難を乗り越えて、関わりを続けようとする時に必要とするリンクワードである。困ったときには、何か行動を起せばよい。学習初期には、“Help me.” と言って助けを求めることを学び、学習が進むと、“How do you say ~ in English?” というように、困難を乗り越えるために必要な支援を求める力をつけていくようにする。

このように、リンクワードとして体系的に整理しておけば、児童生徒が状況に応じて的確な表現が選択できるよう、展望をもって段階的な指導に当たることができる。

### 3. D.C. Methodによる指導

本研究は、会話が継続する指導法の開発を目指すものである。従来の指導では、主要言語材料を使った会話のモデルを示し、実際に会話活動を行い、そのフィードバックを行うのが一般的であった。これに対し、ソーシャルスキルの体験学習モデルを参考に開発したのが、Deepen Communication Method (以後、D.C. Methodと略す) である。その基本形は、図4のように描くことができる。

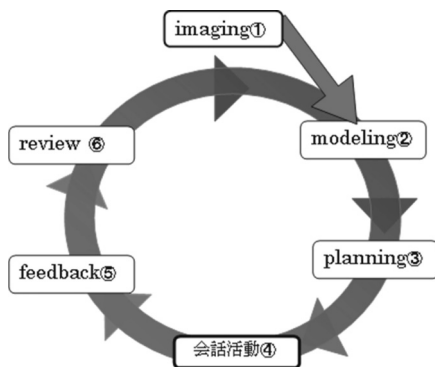


図4：D.C. Methodの基本形

従来の会話指導に、会話を展開していくためのイメージを持つ①imagingと、会話の展開の計画を立てる③planning、前回の会話活動を想起させる⑥reviewを加えたところに違いがある。

吉田ら (1982) は、ソーシャルスキルのトレーニングにおいて、フィードバックの重要性を指摘している。また、コプら (Kolb et al., 1971) は、体験学習のステップとして、a) 具体的な体験をし、b) その体験を内省したり、自他の体験を観察したりし、c) 経験したことを抽象的に考え、一般化を試みて、d) 新しい体験に導くために自分の行動の仮説化を行う方法を示している。特にd)の仮説化は、D.C. Methodにおいて非常に重要なステップである。これは、新しい場面で学習者自身が具体的に行動プランを立てるものである。これを、実験的に試みることによって学習者は、不慣れな第2言語に対して下準備をすることができ、行動レパートリーを広げることにもつながる。D.C. Methodでは、これらのステップを取り入れ、学年に応じたサイクルを形成する。

#### (1) D.C. Methodによる低学年の指導

対象学年：小学校1年生

リンクワード：“OK”

会話活動の場面：授業のはじめの帯活動

会話形態：スクランブル

図5に示すのは、低学年のD.C. Methodである。英語学習開始初期の児童にとって、最も重要になるのは、挨拶などの基礎コミュニケーション力である。また、小学校入学時に既にはっきりと予兆が見られる英語能力の2極化(樋田2011)もふまえ、英語をよく知っている子もいることや、元気に反応する良さを認めつつも、わからない時に「わからない」と伝えるべきことを奨励していく必要がある。

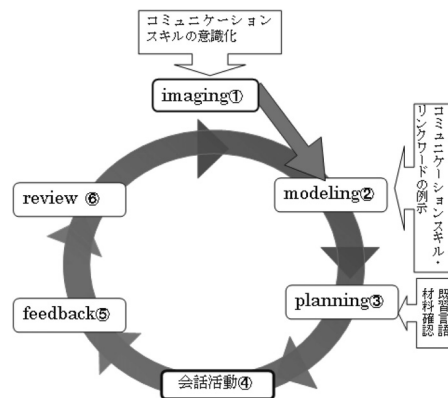


図5：低学年のD.C. Method

低学年の実験クラスでは、modelingの中で相手が一方的に話した時に、どうしたらいいかを寸劇や紙芝居を使って示し、分からなければ“Pardon?”と尋ね返し、分かったときは“OK.”と応える基礎コミュニケーションのリンクワードを導入した。planningでは、教師が大きな声で話した時と、早口や小さな声で答えた時の2つのパターンを示し、自分の理解や不理解を伝える方法について考えさせた。検証を行ったA小学校では、年間17時間と授業時間数が少ないため、reviewを行った上で、会話活動に入るようにした。

### ◇小学校1年生の検証結果

#### [効果1]

実験クラスのポストインタビューテストでは、教師が“I like elephants.”と言ったことに対し、分かったことを伝えるために“OK”と答えた児童の割合は、72%であった。隔週1時間であることを考慮に入れると、リンクワードの“OK.”が習得されたと判断できる。

#### [効果2]

ポストインタビューテストにおいて、既習語のdogとcat、未修語のsparrowを音声で聞かせ、どれかを指で示すよう指示したところ、プレテストでは、わからない言葉に出会った時に、何もしなかった児童が、ポストテストでは、首をかじげたり、自分の予想を言ってみたりするなど、理解に向けた行動をとるようになった(図6)。

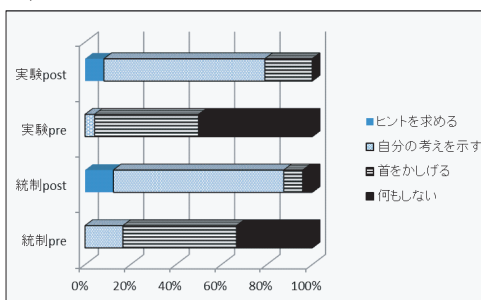


図6：小学校1年生未知語に対する反応

#### [効果3]

統制クラスと実験クラスの既習英語表現の表出や理解に関して比較するためポストインタビューテストの結果についてt検定を行ったところ、

既習語の表出に関わっては有意差が見られなかったが、理解に関しては、実験クラスが統制クラスよりも高まっていることが分かった ( $t=2.838, df=49, p<0.05$ )。

### (2) D.C. Methodによる高学年の指導

対象学年：小学校6年生

リンクワード：“You do.”

会話活動の場面：授業のはじめの帯活動

会話形態：スクランブル

ペアによる1分間×3回の会話活動

高学年の児童は、スポーツやテレビ番組など興味の対象がはっきりしてくる。ある程度既習言語も揃ってくるため、好きなスポーツの質問から、好きな野球選手の話へと話を展開できる児童が増えてくる。planningやfeedback、reviewといった全体交流の場面を大切にしていけることが重要である。話す相手が自分の回答に対して何らかの反応を示してくれることに喜びを感じるようになる。そこで、6年生でよく取り上げる、“What ~do you…?”の答え“I …~.”に対し、「へえ、そうなんだ」を表す“You do.”という、関わり力に関するリンクワードを導入した。

図7は、高学年用に描いたのD.C. Methodのサイクル展開図である。

### ◇小学校6年生の検証結果

インタビューテストでは、児童主導の会話をを行った。教師が児童の質問に答える形成で、会話を2分間継続させるようにした。

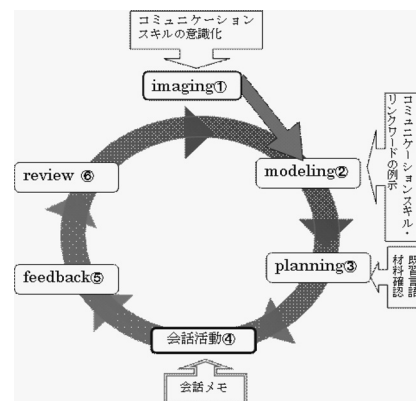


図7：小学校高学年のD.C. Method



[効果1]

図8は、話に対する相手の反応の仕方を表したものである。

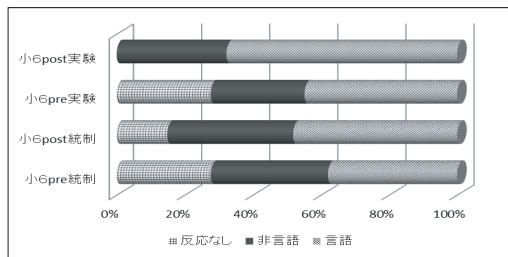


図8：「関わり力」の変化 小学校6年生

この結果によると、D.C. Methodによる指導の後、実験クラスの児童の全員が、非言語または言語により反応したことが分かり、「関わり力」の向上がわかる。

[効果2]

次のスクリプトは実験クラスの男子Aのポストインタビューテストにおける会話のやりとりを表したもので、31のサンプルより抽出した。

表6：児童Aのポストテストスクリプト (2分間)

児童A (男子)	教師
I'm fine and you?	How are you?
What color do you like?	I'm great, thank you.
How about blue?	I like yellow and black.
What food do you like?	So-so.
You do. How about	I like <i>sukiyaki</i> .
curry and rice?	Yes, I like <i>gekikara</i> curry.
I see. Me, too!	
What character do you like?	I like Mickey ○○.
You do. How about △	Yes, I like ○○
△.	characters.
	Do you like ○○
	characters?
So-so.	

A児は、話す相手の解答を受けて、“You do.”や“Me, too.”と、自分の考えを交えて反応している。また、相手の回答を受けとめて、“How about ~?”と、共有する情報を増やそうとしている。ここに、「深まり力」の向上が見られる。

[効果3]

リンクワードの表出については、小学校6年生と中学校2年生対象のインタビューテストの

比較で次のことが明らかになった。

インタビューテストでは、表7・8のように「そうなんだ」と相槌をうつつための新しいリンクワード“You do.”と、「まさか」と驚きを示す“No way.”を同時に導入した。中学校1年で取り上げられる“Why?”については、当然のことながら中学校2年の使用が多かった。“You do.”に関しては、小学校での表出が多かった。

表7：小6と中2年の実験群におけるリンクワード表出に関わって処理したケースの要約

処理したケースの要約	ケース					
	有		無		合計	
	N	パーセント	N	パーセント	N	パーセント
You do.	15	11.6%	114	88.4%	129	100.0%
No way!	6	4.7%	123	95.3%	129	100.0%
Why?	31	24.0%	98	76.0%	129	100.0%
How about ~?	12	9.3%	117	90.7%	129	100.0%

表8：実験グループと導入した表現を表出した人数クロス表

度数	You do.	No way!	Why?	How about ~?
小学校6年実験クラス	10	3	12	9
中学校2年実験クラス	5	3	14	3
合計	15	6	26	12

(3) D.C. Methodによる中学生の指導

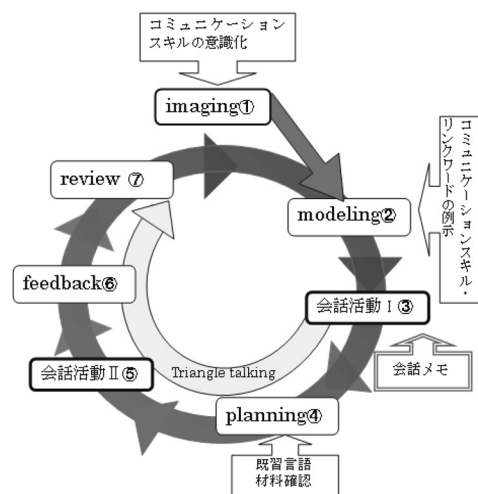


図9：中学生のD.C. Method

対象学年：中学校 2 年生

リンクワード：“You do.”

会話活動の場面：授業のはじめの帯活動

会話形態：3 人による会話活動

中学生になると、「他者の目に自分自身がどのように映っているのかを意識する。そのため、他者からの肯定的な評価によって、今まで気が付かなかった自分の新たな面を発見して、自分自身への理解を深めたり自分自身を受け入れたりすることができるようになる。」(佐藤絵里 2005) 会話練習でよく用いられるペア活動では、会話に意識が向き、2 分間の会話がどのように展開されていったかを自己評価しにくいという欠点がある。そこで、ペア活動を見守り、助言や評価を行うコメントーターを置く。コメントーターは評価者であると同時に、会話の展開を学ぶ学習者でもある。高学年の D.C. Method では、図 9 のように、会話活動の①と②を行い、①と②の間の planning においても、コメントーターが助言する。

#### ◇中学校 2 年生の検証結果

##### [効果 1]

インタビューテストは、小学校 6 年生と同様、生徒主導による 2 分間の会話の継続を記録し調査した。

生徒Q: What color sports do you like?

教師A: I like volleyball.

生徒Q: Do you play volleyball?

教師A: No, I don't.

生徒Q: If you have time, what sports do you want to play?

教師A: I will play golf.

上記のように内容につながりのある質問と解答を 1 セットとカウントし、集計した結果が表 9 である。

実験クラスと統制クラスを比較したところ、発話数には有意差が見られなかったが、実験クラスが統制クラスよりも多くのセットで会話を行っていたことが明らかになり、顕著な有意差が見られた ( $t=-6.099$ ,  $df=66$ ,  $p<0.01$ )。

表 9：中学校 2 年生会話のつながりの比較

項目	t値	自由度	有意確率 (両側)
Pre発問的発話数	-0.623	63	0.536
Post発問的発話数	1.884	66	0.064
Pre 最もつながった会話のセット数	0.000	66	1.000
Post 最もつながった会話のセット数	6.099	66	0.000

##### [効果 2]

ポストインタビューテストの結果から、実験クラスの生徒は、統制クラスの生徒に比べ、既習語を使う傾向が高かった (表10)。これは、会話を継続していくために、相手の情報をより詳しく知ろうとする態度が既習言語材料の運用に結びついたものと考えられる。小学校高学年のリンクワードの表出が中学校より進んだのに比べ、中学校 2 年生では、会話の内容に注目し、その内容に関する質問を続けたり、相手の答えに自分の判断を加えて反応をしたりして、相手との情報をより多く深く共有していくことが明らかになった。

#### V. おわりに

##### □会話の継続性への効果

小学校 6 年生の会話の継続に関しては、プレテストとポストテストにおいて、大きな変化は見られなかった。しかし、中学校 2 年生においては、話の内容に注意を払い、相手の回答に応じて相槌をうったり、その回答に関連させて新たな質問をしたりするなど、内容を深めていく会話活動を行うことに効果があることがわかった。

中学校 2 年生対象のポストインタビューにおいて、実験クラスと統制クラスの間に見られた最も大きな差は、実験クラスの生徒のほとんどが、スポーツやゲームなど、自分が「話したいこと」を持って会話に臨んでいたことである。プレインタビューでは、「うーん。何を話そうかな」と、尋ねるための英文を探すことに窮していた生徒が多かったのに比べ、ポストインタビューでは、話題が多様で、自分が興味を持っている話

表10：児童生徒が使用した疑問文比較

グループ		小学校6年				中学校2年				
		実験		統制		実験		統制		
インタビュー調査		Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	
実数		28	31	28	28	32	34	34	34	
<b>What ~ do you like? (小計①)</b>		88	106	90	94	76	47	76	59	
What	be 動詞	name	What's your name? (husband's name)		1		1			
		favorite	What's your favorite ~?					3	1	
		is	What's this?			1				
			What ~?				4		2	
	day	What day is it today?		1						
	一般動詞	play	What ~ do you play.				2			
		have	What ~ do you have?				2		2	
			What do you have for breakfast?				2		3	
		do	What do you do?	1						
		cook	What do you cook?				1			
		want	What do you want?							
		未来	What are you going to ~?						1	
		不定詞	What do you want to do? (now)					1		
	一般動詞の過去 did	study	What did you study yesterday?						1	
do		What did you do yeasterday?				3		2		
get up		What time did you get up?				2		2		
have		What did you have for dinner?						1		
Do	like	Do you like ~?	6	1	5	28	30	30	26	
	want	Do you want ~?					2			
	buy	Do you buy ~?						1		
	see	Do you see ~?					1			
	play	Do you play ~?				4	1			
	go	Do you go to ~?	1						1	
	have	Do you have ~?			3	1	4		4	
	know	Do you know ~?	1		1		5		1	
watch	Do you watch ~?					1				
過去 Did	study	Did you study ~?					2			
watch	Did you watch ~?							1		
Can		Can you ~?				9	1	5	1	
Where	do	Where do you live?	2		5					
		Where do you want to go?		3			5		4	
	未来	Where are you going to ~?							2	
How		How about ~?(others?)		20			9			
	be 動詞	How old are you?	2		5	3	2		1	
	do	How many ~do you have?	1	2		3	6	2		
When	be 動詞	When is your birthday?	1		6		2		4	1
	過去 did	When did you get up?					1			
		When did you become a teacher?					1			
Who	do	Who comedian					5			
		Who (~) do you like?		1			2		1	
Which	do	(Which) A or B?					2		1	
Why		Why?		14			15		6	
	do	Why do you ~?					1			
If	what	If you have time what do you want to do? (are you going to do?)					4		2	
	where	If you can fly where do you want to go?					1			
		If yo have teime where do you want to go?						1		
do	If you have many money do you buy ~?						1	1		
Are you	現在	Are you ~?			3		1			
	未来	Are you going to ~?					1			
<b>小計②</b>		6	49	17	18	59	97	44	64	
総計		94	155	107	112	135	144	120	123	

網掛け：ポストテストのみで使用された疑問文

網掛け+太枠：プレポスト後に導入した表現

題から会話を始め、展開していく傾向が見られた。

英語会話に主要言語材料の習得は不可欠である。しかし、英語で自分の思いや考え、気持ちを伝えあい、他者理解も進んでいくような真の会話となるよう、話をつないでいく会話指導を中学校で重点的に行う必要がある。

#### □リンクワードの系統表の有効性

表2～5の系統表は、言いやすく身近な表現が行われる活動や教材を参考に、発達段階に合わせて配列したものである。例えば、“Excuse me.”と助けを求める表現は、活動がやや複雑になってくる中学年の時期に配置した。その後には、聞き返す時の表現として、“Excuse me?”が続いて導入される。これは、小学校1年生から英語活動を行っている地区のカリキュラムを元に作成したものである。

リンクワードは数多くあり、ALTの国によって表現が変わっていたり、中学校で取り上げられる表現も教科書により違ったりする。英語の免許を持たない学級担任にとっては、どんな場面でどのような表現を導入することができるかを把握する資料となる。

#### □リンクワードの指導適時

検証結果で注目すべきは、小学校6年生のリンクワード活用が中学校2年生より多く行われたという事実である。今回調査した「関わり力」に関するリンクワード“You do.”は、小学6年生の方が活用をしていた。中学校2年生の質問と質問の間の時間に注意してみると、“You do.”と同じ理解を示す既習リンクワード“I see.”や驚きを示す“Really?”などを使用するが多かった。実験クラスのポストインタビューテストで、プレテスト以降に学んだ表現が統制クラスに比べ多く表出されていた事から考えると、中学校2年生が会話の内容に注意を払い、相槌を打つことよりも、その回答に関わって知りたいことを、既習の表現でどのように尋ねたらよいかに注意を払っていると言える。言い換えると、既習言語材料が増える中学生には、言語材料の運用の指導を充実させ、小学校においては、身近で言いやすく、且つ場面に合ったリンクワードの活用指導の充実が心がる必要がある。小学校で必要なリンクワードを多く備

えていた児童は、中学校では、学んだ主要言語材料を効果的に使い、話者同士の関わりを深めていく内容のやり取りに集中できるようになる。

最後に2011年度にA小学校とB中学校が位置する市が行った「小学校英語学習アンケート調査」において、「英語の勉強は楽しいですか」という問いに対し、リンクワード指導を行った小学校1年生と6年生において、「楽しい」または「どちらかと言えば楽しい」と答えた割合が市全体の平均よりも多く、英語コミュニケーションの楽しさを味わう指導の効果が高まることにつながったことを付け加えておきたい。

#### 【文献一覧】

- 大下邦之 (2009) 『意見・考え重視の英語授業』 高陵社書店  
 菊池章夫 (1994) 『社会的スキルの心理学』 川島書店  
 国立教育政策研究所 (2005) 「特定の課題に関する調査 (英語: 「話すこと)」 調査結果 (中学校)」  
[http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei\\_eigo/index.htm](http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_eigo/index.htm) (2011年5月13日アクセス)  
 小林正幸 (2007) 『子どもの対人スキルサポートガイド』 金剛出版  
 高梨庸雄 (1995) 『英語コミュニケーションの指導』 研究社出版  
 樋田光代 (2007) 『小学校英語 ホップ・ステップ・中学!』 文溪堂  
 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 外国語編』  
 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』  
 湯川笑子 (2009) 『小学校英語で身につくコミュニケーション能力』 三省堂

#### 【注】

- 1 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 外国語編』, p.14。
- 2 同上。
- 3 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』, p.10。
- 4 高梨庸雄 (1995) 『英語コミュニケーションの指導』 研究社出版, p.7。
- 5 菊池章夫 (1994) 『社会的スキルの心理学』 川島書店, p.203。
- 6 同上, p.204。